

1. 実施概要

(1) 日時：平成24年11月8日（木） 13:30～16:10

(2) 場所：あまが池プラザ

(3) テーマ：「新たに整備した施設を有効活用した地域の活性化」

(4) 進行

- 13:30 開会
- 13:30 開会の挨拶
・守山市長 宮本 和宏
- 13:30～13:50 基調講演
・和歌山大学教授 足立 基浩
- 13:50～14:05 国からの施策紹介
・内閣府地域活性化推進室次長 長谷川 新
- 14:05～14:35 自治体からの活性化事例紹介
・伊丹市長 藤原 保幸
・守山市長 宮本 和宏
- 14:35～16:10 パネルディスカッション
・コーディネーター：足立 基浩
・パネラー：長谷川 新、伊丹市長、守山市長
守山市のまちづくり会社（株）みらいもりやま 21 代表取締役社長 清原 健
- 16:10 閉会

2. 開会の挨拶

- 本日は守山の地までお越しいただき、心より歓迎を申し上げます。今回は、「新たに整備した施設を有効活用した地域の活性化」をテーマに行ってまいりたいと考える。現在、認定を受けて取り組んでいる自治体は全国で107あり、それぞれ工夫をしながら進められているところだ。
- 守山市においても平成21年3月に国の認定を受けて4年目を迎え、残り1年半、しっかり形にしていこうと取り組んでいる。まちの顔となるまち並みをどうつくっていくか、またまち全体をどう活性化していくか、様々な議論をする中で進められている。本日は各自治体の方々、市民の皆様もたくさん来られ、よいヒントを得られればよいと思う。私たちが今日学んだことは、しっかり次の展開につなげていきたい。各方面からゲストをお迎えする中、活発な議論を展開し、よい知恵を共有化できたらと考えている。

3. 基調講演の概要

- イギリスでは郊外型の店舗があり、また中心市街地の商店街もあり、これが見事に共存している。中心市街地から先に店舗等を出すという法律がある。中心市街地はアイデンティティ、個性だと思う。高齢化が進む中である程度まちをコンパクトにし、高齢者の方が歩いて病院に通える、歩いて物が買えるということ。1回ごとに車に乗らなくていいという社会が、と

くにヨーロッパなどではクローズアップされている。

- また中心市街地を観光という面でみればその役割を担えるのではないか。企業誘致の面でも中心市街地が活性化しているところは企業誘致しやすい。
- サステイナブルという言葉が注目されていて、今我々が経験してきている中心市街地を子供たちに残してあげる、それがいちばんお金や資源を使わないで文化的な物が残せるし、経済的にも繁栄するという考え方だ。
- 今注目している都市としては、収益連動型の家賃制度を取り入れている福井市をはじめ別府市、大分市、高知市、和歌山市がある。成功しているところの共通している点は“差別化”といえる。
- 私に取り組んでいる例として8年前から学生とさまざまな場所を活用したオープンカフェをやっている。地域のコミュニティの場にしていくという目標で、他県や様々な企業などと組んだイベントも取り入れて一定の収益もあげ、周辺交通量も増えた。最後にまとめとして、観光地の可能性を捨てないこと、中心市街地しかできない機能を大切に、空き地をうまく活用すること。そしてそのための組織づくりを進めてほしい。

4. 施策紹介

- 特定地域再生という新しい仕組みができた。高齢化に伴う居住環境の整備、地域資源を活用した産業の活性化など全共通の課題に先駆的に取り組む地方公共団体やNPOなどを応援するためのもの。
- 経済産業省の施策では、中心市街地魅力発掘・創造支援事業費補助金が新規で概算要求をしているところ。対象事業の二分の一または三分の二が補助されるという仕組みだ。継続事業としては、委託費事業（2億円）がある。
- 国土交通省の施策はまちづくりという観点からのもので、「暮らし・にぎわい再生事業」のほか、「まちなか居住の推進」では、共同住宅の供給、居住再生ファンドの金融面の支援をする仕組みがある。また土地の成形・集約化として、都市再生区画整理事業、また身の丈再開発の推進、都市再生整備計画事業などがある。
- 総務省では、ハード事業ソフト事業それぞれについて、地方公共団体が取り組まれたものに対して地方交付税で支援するという仕組みをもっている。
- 日本再生計画として新しい成長戦略のもとで中心市街地活性化を進めると同時に施策の検証作業をしており、（1）中心市街地への回帰と集約（2）分散投資とスプロール化の許容という2点を議論の論点として進めていきたいと考えている。

5. 事例紹介

（1）守山市

- 守山市では、ここ数年人口が伸びているということで、ある意味チャンスととらえている。基本理念を「絆と活力ある共生都市の創造」とし、将来を見据えて絆をしっかりとつけていこうという考えで中心市街地活性化に取り組み始めた。歴史ある中山道、そして川がたくさん流れているところから「水」というテーマを大切にしている。

- 「あまが池プラザ」は、小学校と幼稚園の合築にあわせ7月にオープンし、子育てサロンが頻繁に開催され、広場は多目的に使われている。入っている2店舗は活性化施設と位置づけ、まちづくり会社を通じてテナント募集をして選ばれた。また「うの家」は、宇野宗佑さんの生まれ育ったところで、美味しい近江牛が食べられるお店や蔵を使ったカフェ、また文化人としての功績を展示する施設、市民が使えるギャラリーもある。これらの施設では、演奏会やコンサートなどイベントも開かれる。この拠点として整備したプラザ、中山道の「うの家」、そして楓三道、この狭いトライアングルを歩いてもらい起爆剤として波及効果を狙っている。
- また行政が半歩進んでという姿勢で、整備事業として公園、学校の建て替え、バリアフリーなどに60億をかけてやり、民間事業にも協力してほしいということでいくつか有効活用の話も進んでいる。このほか水を大切にしたホテル散策のネットワークや「うの家」を中心に歴史を感じるまち並づくり等、回遊性を高めるまちづくりを進めている。

(2) 伊丹市

- 伊丹市は、空港のあるまち、酒造りのまち、俳句のさかんな俳諧のまちとして知られてきた。また交通も至便な大都市圏でありながら自然環境が残っていて、冬の渡り鳥で知られ、一年中チョウが飛んでいる「昆虫館」といった施設もある。
- 伊丹市の人口は、日本また兵庫県全体でも減少する中で微増傾向が続いている。これは中心市街地への住宅立地が進んでいることもあり、商業の核をつくり、大阪へも便利に通える、住んで面白い、歩いて楽しいまち並みづくりというのをアピールしてきている。市の活性化のポイントは、(1) ことばの文化が大切に育まれているまち。(2) 歩いて楽しいまち並みづくり。(3) 伊丹市の最大の魅力は市民力。という観点で進めてきている。
- 郊外に移した施設を中心市街地に移すという取り組みを行っていて、そのひとつが「新図書館」で、本を貸し出すだけでなく広い交流スペースを設け、そこで様々な行事やイベントを行っている。まちづくり交付金制度を活用したものだ。
- 100年前に私設図書館が開設されたのをアピールしたり、伊丹市の苗木が贈られたワシントン桜100周年を記念して“里帰り桜”を植える行事をしたり、また五輪柔道競技で活躍した地元出身の杉本選手の柔道着やメダルのレプリカなどを展示して多くの人を集めた。やはり人に来ていただくには、理屈というより感性に訴えるもの、物語性や面白さ、楽しさや美味しさといったものが大事になってくると思う。

6. パネルディスカッションの概要

《街づくりのためのコンテンツについて》

- (伊丹市長) 古いまち並みに合わせた新しい店舗を誘致しよう、今まで大阪へ行っていたものを地域にお金を回そうとことで「伊丹まちなかバル」を始めた。交通費程度のギャラで多くのアーティストが参加するライブもやっている。アンケートでは新規客もふえ、一定の経済効果につながっている。
- (清原社長) その日に儲けるのではなく、販促イベントであるという説得に時間がかかった。あなたの店を知ってもらおう販促ですよ、と。小規模でいいから継続的にやっていくことを重要視している。そういうことで人のにぎわいできていく。

- (長谷川次長) 地元の人が当たり前とと思っていることが、外から来た人には貴重だということがよくあると聞く。外のアドバイザーを派遣する仕組みもあるので活用いただければ。また財政的に増える傾向ではないので、自助、共助、公助とあるが共助の部分をつくらせるなど工夫も必要では。
- (清原社長) 文化を継承するにはもってこいということで「うの家」が実現した。戦略的補助金をいただきながら、(独) 中小機構のアドバイザー支援もいただいた。
- (守山市長) 風格のあるまちにしたい、安売りではなく本質的なものを市民の皆さんにお届けしたい、そういう仕掛けづくりをみらいもりやま21さんにお話ししている。単発ではなく毎週のようにイベントがあり、心が豊かになるという中心市街地を目指したい。
- (コーディネーター) キラーコンテンツの成功例をみると、人の巻き込み方が上手なこと。そのひとつがまちづくり会社だ。また住み続けたいと思わせる楽しいイベントがあることがあげられる。



《まちづくりに必要な人材とその育成について》

- (守山市長) タウンマネージャーには人望、商業的なものを含めたセンスが必要で、守山市

は良い方がまちづくり会社の社長になっていただいた。人材発掘は難しいが、キーになると思う。市民参加の方法については、若手に多く役員になってもらい、さらにサポーター制度として若い人たちが登録し、イベントなどに協力してもらう仕組みを行っている。

- （コーディネーター）商店主さんは忙しくなかなか時間がない。そういうときに第三者機関が専属でやってくれると大変ありがたいもの。そういうシステムがうまく回っている感じがする。
- （伊丹市長）伊丹市は各地域に中心となるキーマンが育っていてうれしく思う。市民グループ、文化財団、昆虫館などにも人材が育ってきている。また「伊丹まちづくり大学」で人材育成も行っている。シニア層のマンパワーをまちづくりに発揮していただくのも良いことだと思う。
- （長谷川次長）大事なこととして待遇改善もあげられる。またよろず相談窓口も経産省のホームページにあるのでご活用いただきたい。震災以降、とくに東日本では、防災の側面からもまちづくりや絆づくりを捉えてきている状況がある。
- （伊丹市長）地域の皆さんがそれぞれ地域を盛り上げようとして自ら動く、行動することがこれからの時代、何よりも大事なのではないか。ひいては国全体が活性化する。地域が頑張るって国を元気にしたい。
- （長谷川次長）ルールや法律を地域の実情に合わせて変えることで、少ないお金でより効果を生む。そういう大きな流れがある。またお手本になるような先駆的な取り組みを応援しようという流れもある。
- （コーディネーター）まとめとして、キーワードのひとつは“愛着”。センチメンタル価値と呼んでいるが、そういう愛着を各地域がもてるような取り組みがあったらいいと思う。

この後、一般参加者より郊外から中心市街地への公共交通の重要性についての質問があり、守山市長、伊丹市長から現状説明や見解が述べられ、さらにコーディネーターから海外の例などが紹介された。

7. 閉会